

# 先住民族アイヌと ワイルドサーモン


## 野生サケを細かく呼び分けるアイヌイタク

アイヌ語研究者として多大な業績を遺した知里真志保博士(1909-1961)の『分類アイヌ語辞典／植物編・動物編』(『知里真志保著作集』別巻1-2、1975年)の「さけ」の項には、アイヌモシリ(北海道島、カラフト島、クリル諸島)の26カ所以上のコタンで採集した延べ150におよぶアイヌ語名が収録されています。

オスとメスを明確に呼び分けるのはもちろん、沿岸に来遊してきた海のサケ、川をのぼり始めたサケ、婚姻色が現れたサケ、産卵床を掘っているサケ、尾が擦り切れたサケ、傷ついてヒレが白っぽくなったサケ、卵を産み終えたサケ……と、生活史のステージごとに細かく名前が使い分けられていることが分かります。

これらのサケは、もちろん地域在来の野生サケ、正真正銘のワイルドサーモンです。


アイヌ語で呼ぶサケの名前 (各地共通) ほまほま	ipe	<b>イペ</b>	サケ
	kamuy-cep	<b>カムイチェフ°</b>	遡上初期のサケ
	os	<b>オシ</b>	雌ザケ
	ca	<b>チャ</b>	雄ザケ



**アブタ**  
蛇田

チェフ  
カムイチェフ  
ヘレルシチェフ  
ペウレチェフ  
アシツチェフ  
イットチェフ  
メスカシ  
オイシル


サケ  
サケの総称  
光る魚  
走りのサケ  
川へ入りたてのサケ  
川へ入って一日もたためサケ  
背びれがすれて白くなった雄ザケ  
産卵後の尾のすりきれたサケ



**サル**  
沙流郡

シチャ  
イナウコツチェフ  
ヘレルケチェフ  
オイシル  
チボルサク  
チボルサクオイシル  
シベナンポ


サケの大なるもの  
並外れて小さなサケ  
光る魚。シロツケ  
産卵後の尾のすりきれたサケ  
産卵後の老雌魚  
卵を失ったホツチャレ  
目玉の大きな稚魚



**カラフト**  
サハリン  
西海岸

チュフチェフ  
カムイチェク  
デタラチェフ  
オキライ  
カムイエウエイヒラハ  
オシ  
マイネフ


サケ(北部)  
サケ(南部)  
銀鱗のサケ  
産卵後の尾のすりきれたサケ  
川に初めて入ってきたサケ  
雌ザケ(南部)  
雌ザケ(北部)



**シベチャリ**  
静内

カムイチェフ  
ヘルラム  
ペトルンチェフ  
イチャノルンチェフ  
オイシル  
チボルサク  
ウフサク  
モセチェフカムイ


サケの総称  
光るウロコ  
産卵のため川へ入って来たサケ  
ホリを掘っているサケ  
産卵後の尾のすりきれたサケ  
産卵後の老雌魚  
しらこをかけ終わった老雄魚  
草を刈る魚神さま



**ナヨロ**  
名寄

チュクチェフ  
チカピベ  
イチャンチェフ  
オキライ  
ホマオフ  
オシ


秋とれるサケ  
時期おくれに入ってくるシロツケ  
ホリを掘っているサケ  
産卵後の尾のすりきれたサケ  
卵・入っている・者  
雌ザケ



**ビホロ**  
美幌

ウベンチェフ  
ベツノンカル  
ペトウシチェフ  
メッカウシ  
イチャノルンチェフ  
オキライ  
イシルチェフ  
イットオマサク  
ヤイトウイカコル


若い魚  
いちばん先に川へ入ってくるサケ  
川に永くいついた魚  
ホリにつきかけた雄で、背の辺が少し白くなったもの  
ホリを掘っているサケ  
産卵後の尾のすりきれたサケ  
産卵後の老雌魚  
1尾の皮で keri の片足が出来るほど大きなサケ  
クマを獲った時に背負わせてやる大切なサケ  
筋子をぶら下げている仔魚  
魚の子、小魚



**クリル**  
北部

サケ  
シチェフ


サケ  
真の魚。サケ



**ノチコイケ**  
シベラム  
チェボ

クマを獲った時に背負わせてやる大切なサケ  
筋子をぶら下げている仔魚  
魚の子、小魚

出典 知里真志保『知里真志保著作集「分類アイヌ語辞典／植物編・動物編」』平凡社、1975年


**シコツ**  
千歳

**マレクと  
イサパキクニ**  
繁殖遡上期のサケに特化した漁具


繁殖のために群れをなして川をさかのぼってくるサケたちを待ち受け、一尾ずついねいに捕獲するための道具、それがマレクです。川の規模に合わせて、手ごろな長さの木の枝を現場で調達し、その先端にマレクをしっかり結わえつけたら準備完了。射程圏の獲物に狙いを定め、水上から勢いよく突くと、可動式の鋭いカギが自動的に魚体に食い込む仕掛けです。捕らえたサケは、イサパキクニで頭を叩いて丁寧にホブニレ(カムイの国に送ること)します。

(左)2018年12月29日、千歳アイヌ協会が千歳川でメディアに公開したマレク漁。マレクの使い手は、千歳アイヌ文化伝承保存会の佐々木翔太さん。

(右)石辺勝行・千歳アイヌ文化伝承保存会会長の手になるイサパキクニ。皮を残した部分が把手。



**サケには新しい  
イパッケニを**



**ウリウ**  
雨竜

天の川に石狩川の映りくあいてchiepがとれるかとれないかを見るんだ。雨竜川と石狩川の出合いのへんが明るい石狩川も雨竜川もchiepがたくさんのぼる。暗いとさっぱしだな。特に雨竜川はよ。

keri(靴)はホツチャレになったおんたの皮よ。川をのぼってきて背ビレも白くなったやつだ。めんたは皮が薄いからダメだ。おんたでも海や川の入り口のは、やっぱり皮薄いんだ。だから川をのぼったのが一番いい。

イパッケニ(頭叩棒)に使うものは、変なもの使うもんでない。ちゃんと柳かミズキでよ、削りかけつけてな、ちゃんとしたもの作るんだ。

こんな話、あると。

母親から子どもが川から水くんで来いと言われ外に出てみたらいい月なんだと。子どもはお月さんを見て「お月さんはいいな。いつも空から眺めておれて、働かなくてもいいし」と言ったらお月さんは「そんなこと言うもんでない。アイヌモシリ(人間の国)いるものは怠けるんでない」と言っていたさらに子どもをさらっていった。ハボは子どもがなかなか帰って来ないので水くみに行った川にでも落ちたのかと思って探していた。ウグイに会ったから「子ども見なかったか」と聞いた。ウグイの言うには「いつだかアイヌからしっぽの骨まで回くてだめだ、と言われたから教えない」と言われた。

泣く泣くまた下って行ったら、イトウに出会ったので子どものことを聞いたらいトウの言うには「口でかいと言われたから教えない」と言われた。

さけに会った。さけの言うのには「いつも新しいイパッケニ(頭叩棒)で叩いてくれ、大事に扱ってくれるので教えてやる。子どもはお月さんがさらっていった」と教えてくれた。お月さんを見るようになるほど子どもがニヤトシ(水汲み桶)を持って立っているのが映っていたと。だからイパッケニは古くさいもんなんか使うもんでないんだ。月にさらわれた子どもは、働くのが嫌な子どもは私のようになるって言っているんだ。

「杉村キナラブックの話 kokisankur……(平田角平研究ノートから)」  
石狩川中流域文化研究会編『パニウングルの生活文化誌』2003年から抜粋